越山に登る記

灌山と水之介岳の間相交叉する所、遥かに一座の大山蟠屈するを見る。斷崖千尺の奇峰あるに非ず、屹立天を撐する高山にも非ず、されど久しく余輩をして登山の念に堪へざらしめたるは何ぞ。本越は大陸的山岳の性質を帶び其嶮峻にして起伏する峯巒、淺かに流るゝ支脈は何となく山嚴の感を起さしむ。若し朝日赤だ昇らざる時窓を開て望めば、皆不盡白雪山谷に滿ち、斷雪其山腹を掠むるを見る。夕陽既に沒し暮然たる暮色村落市街を包む頃、其頂は夕陽に輝き山麓に沒し嵐の趣を見るあり。

十一日晴。早朝家を出て出発したるは、越山に登らん為なりき。時に天晴れ空拭ふが如く、風は高く暮天に響ひ、朝氣肌に徹して爽快言ふべからず。船頭河岸に達する時、突然群集の中より余輩を呼ぶ者あり。顧みれば一個の年老たる男なりき。彼は曰へり「本立に御越にやと」。余輩て何を以て彼の斯う云ふを解まかれば兵然りと答へり。彼は余輩を河岸に驚ぎたる河船の一に導き、始め余等は其渡船なるを知りたりき。船中には既に二人の男乗り、船頭は直に発船すべしと問へり。何無調子なる大声あげて客を呼べり。客は陸続として来り、早七八名に達し、皆田舍浦前向きの行商なりき。空籠を提げて乗り込みたる二人の農夫あり、彼等は早朝市を期へ来り、今買り尽くして去家に帰るならん。彼等満面笑を含みて買價のよかりしを喜び、余輩と雑談実に無邪気、傍人をして感ぜしめたりき。

河岸は河船の群集する所なり。陸上には、郭市を以て雑閑を極め、河には薪炭野菜等積みたる船、人を乗せて出る船、他間あらざりき。船頭まだ出発せざるに、船は下流に向て静かに櫓を始めたり。上流は遠く眺むれば河は幾分に屈曲して走る山麓皆倒映し、恰も湖水の如し。[redacted]は江葉にたる櫨黐に彩々たる黄木の波打つが如く、皆秋の闌なるを示すなり。余輩閑なるを以て、時に船客運とは談話歌にして諧謔滑稽、相次ぎ人を笑はしめたりき。

[illegible]話頭を風の[redacted]面を掠むるが如く軽く驚し、愛嬌の実法を門外漢なる余等の耳を傾けしめたり。船は何時か茅屋が鼻も過ぎ、弥人と一時間許りにして本立に着き、草鞋、脚絆をもとめ河に沿て上

皆秋の闌なるを示すものゝ、金芽周囲の美景に對して郷愁無
こゝなりき、時に船宴運に供し、議論發揚にして諧謔、滑稽、相次ぎ人をして捧

腹せしむ、話頭転じて風の[illegible]面を探むが如く軽く轉じ終まの実流を
門外漢なる余等の耳を傾けしめたり、船は何時か茶屋が鼻も過ぎ
弥人ヶ浦に入り、茅渟に着きぬ、草鞋、脚絆をとめ河に沿ひて上
る清流に跳る魚を見て赤が心を躍らしめ、河を隔てたる緑草の
上には数多の男女里謡を歌ひつゝ稲を刈り、或は束ね、牛は山の如き
稲を荷ひくと打たせて脱穀場に運ぶ、元越山は遥かに黄金の海を
限り、孤林孤村其間に點在し、清流も迫る、そは流れ秋を海野を
照らし、[illegible]黄禾の海は元越山の麓にて左
右に分る、金芽は左方に南に行く、道は豊錦の前を横ぎり馬屋の側を
通ず、谷の尽くる所一山横たはる浦代峠と京、道、疎林に入り、渓流遠
脚下に潺々として鳴り風に樹間に起りて合かに面を打つて去る、林を距て
人語を聞けば更に静かなるを感ずるのみ

坂上茶屋あり中に二人の女あり、就て道を問ふ、婦曰く「道あれど悪しく
て通り難し」、蓋因は他頃に於て行きたれど途にて帰り、猶に畳嘉芽

不室内の道あれど到底此道よりは遥に難けん、坂を下れば細き道あり、しかも
嘗て金芽周囲の坂を下りて好まず、強て道を問ひ、芽数多歩むるに果して
丈を没せん計りの手齒茂りて進むべき術なし、されど強情まけん気に駆られ
れ野猪の如く突進、漸くにして雑樹疎なる所に出づ、首を揚げて望めば
既に豊後宮田に出天に接へ前面を遮る山の低き所より蒼々たる大海の
孤片を見るを得、益々勇気倍の壮觀を呈す、されど道念正しくして扇衾へ
又進むの勇ましめの奮興剤にして博飲を飽食し、進猛ぶ元気
と致して撃ち大金の藩木撃ち刺蘇道を遮る道を離れず僅かに野獣
の径を探り行く其行ムや怪も士龍の如く頭を以て樹木を排して突進すれり
豊後に帽子を脱ぎ、嫌ふく樹枝の為め破られ、忽ち家見小声に叫べり
「猪の足跡あり」と余地せ立ちて見るに果して猪の跡歴然として印されて見
る、進むに従て急明あり、金芽足跡余り小なりと叫べ、或は鹿にて非らざるかと
思へり、されど家見ナイフを用ひて進むも後より思へばまかし、椎樹漸
尽き、望間く鶴ケ水に断崖高く聳りて岩頭に江葉、然へ左右谷深し

二面あり、霧はたして人理遠き人キの山の奥元鹿であく目の句を思はしむ
庶幾の如き岩を攀づる事数くして本道に出、其時の一　の感実に
筆低の及ぶ所に非ず、暗望する土蹠より出づ、天日を拝し九死に一生を免かれた
る

閑然奮興剤

元越山

了、進むに従て愈明かり、金華屋敷余り小なりとは云へど鹿にて行くかを思へり、されど家見ライフを用ふるに進むも後より思へば甚かし、椎樹漸尽きて望見く鶴ヶ水ば断崖高く聳りて出岩頭に江藻、燃へ左右谷深し

閑然奮興録前

三面多く霧なりて人理遠き人手なき山の奥、鹿ぞ多く居る」の句を思はしむ

馬背の如き峯を登ること本道に出づ、其第一の感実に筆低の及ぶ所に非ず、暗黒なる土屋より出で、天日を拝し九死に一生を得たるが如し、新緑の勇気、浮々として湧き出づるが如し、一二丈にして左右に僅かに切り開きたる跡あり、岩屋雨滴を注ぎ心苦薬なる石佛老樹の本に建つ、馬側の蟠根に老樹の休を見る、金華彼に隔上に達する距離を問へば彼小指を出して答へ曰く、目測疑み問へば何度より来りて何所に行くかと金華答へに、秀しく果然の田畝を注ぎ、僅に数坪を見るを以て彼も亦其国就を知りたるに、や大に同情を表し、牧牛鹿相合ふ人手山に出没する以て、辱しく上り数町にして頂上に達せり、周囲に一樹一叢の遮るなく立に仰ぐに一峯三角矢(側量基)あり、傍を見れば校を敷く二畳、那須王最便なり、されど金華の最も愉快に感じて去り難き所なり、漂渺たる大平洋忽長蛇の雨の四に分りたるが如く実に甚高遠なる大観に接したり、一種の心胸に対たる所人と語ること能はざるなり

東京

大平洋を南方に開き嵐と共に限りなく水平線を画して金華を望む

形勢、倍々美なり、大江あり、山を負ひたる二三の漁村は夕陽を浴び

ヶ水(用)白帆点々海水に映ず、年此一所に一個の好画材たるを失はず

首を上げて乗りを望めば四国地は大磯の伏したるが如く眺望して遠なり、南洲

海のに大浮世に突出せり、顧みて西南に向へば四人丈なる日向の海以内は

天陸形をなして甚南洲大平洋に相の如く没し去れり

日向地(所洲)の連山は漠々として重畳、嗚呼筆三千歳の意

神武大帝意気慨然、数千の健児も此地に出でたり、所謂の情状々

として禁ずる能はざりき、況んや三千歳義烈の記興起せしたり義信

万の人は生れ変化円の人は死せり、ユヘに山川草木皆寂として語らず、河は

そも流れ山又頑として立つ、歴史の五を傳ずるのみ

北を眺むれば豊後国は広そも、即山の上に佐賀関は遥に佐田の長岬と

相対して立を見る、雲か山か水か平線上に横はるは、故郷の手ヶ山なり、嗚呼

故郷！故郷！家近かり故郷に向て呼べば、彼所に父母アルなり、明友あるなり

知人あるなり、琴石山傳山あり、別所の人江波打つなり、復た思へば万

歴油然として胸間に迫る、覚えず

樽上にあり手一所家自暫く西に斜きたるを以て此大観に向て別を告げ山を

北を眺むれば豐後富士は瓜そっくり、耶山の上に佇へ佐賀領は遥に佐田の長崎を
相對し立を見渡し雲か山か水か海上に横はるは故郷の青山なり、嗚呼
故郷！故郷！爰迄か故郷に向て叫べり、彼所に父母アルなり、明友あるなり

知人あるなり、琴石山傳ひあり、別府の大江浦打つなり、復た思ふに之を思へば万
感油然として胸間に迫る覓へるなり
樽丘に登る事一時余日暫く西に斜すたるを以て此大龍に向て別を告げ山を
降りて遠に孤御の釜より来るに合ふ藤瀬に乗て暫く休憩す、傳聞な
来路に比して大道堂々一里余にして山麓に達したりき、例の大豆の産出場所
く達したる時既に夕の斜まなる茅屋の内より叫び止めにて葉に葉りたり
日既に没したる又死し水面漂ふ月の如く艪声ものものに水を埒に伴して
晩烟水面に無き
晩烟なかくを見て、底かなる色を伸ば船に帰り相談して赤間関
佐伯に着船す、は寓居に帰りしは最早矣燈の時なりき、旅装を解き
一浴終て一日の疲労を洗ふ夕なり静かに夏日の暮を語り易かず遠を
仰て偶一大慨伏たる也笑んなるなり